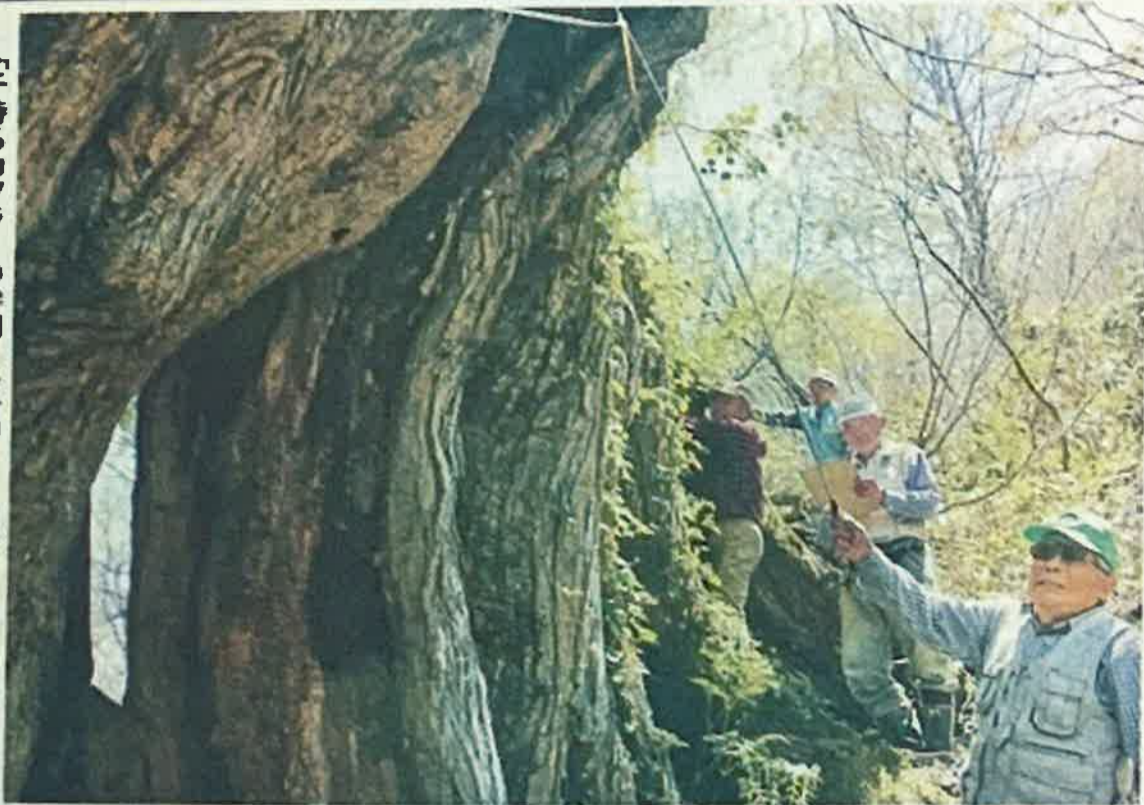


白山の生き証人「元気」

北國新聞社の手取川環境総合調査団は28日まで、流域の代表的な巨樹の「健康診断」を始めた。長い時間と豊かな自然によって育まれた巨樹は地域の生き証人であり、調査結果は、世界ジオパーク「白山手取川」の自然環境を次代へ引き継ぐための貴重な資料となる。第1弾として白山の山中に立つ樹齢千年超の「子持ちカツラ」を調べ、「元気な状態を保っている」と診断した。



「子持ちカツラ」の幹回りを計測する調査団員11日、白

樹齢1000年 子持ちカツラ



樹木・植物グループが「石川県巨樹の会」と樹木医の協力で実施する。

白山市の天然記念物である子持ちカツラは、白峰・市ノ瀬の御巢鷹山（標高1400㍍）北側斜面に立つ。市のホームページによると幹回り15・6㍍、樹高43㍍。県内で最大のカツラで、県巨樹の会が1996年にまとめた番付表では、高知県の木と並んで東の横綱に位置付けられた。

ただ、山奥深くにあるため人がなかなか近づけず、



山の斜面にそびえる「子持ちカツラ」

調査団 巨樹の健康診断開始

状態の確認は容易ではない。調査団員で県巨樹の会副会長を務める間明弘光さんによると、今回の調査が巨樹の会としても96年以來の本格調査とみられる。

カツラは主幹が衰えると周りから芽がたくさん育つ「ひこばえ」が特徴。子持ちカツラは既に主幹が朽ちて内部は空洞で、周りの幹が集まって伸びている。

積雪や台風による枝の欠損が認められたが、病害虫などの被害はなく、健康状態は良好と判断された。樹木医の八木豊夫さんは「葉のつき具合も良い」と目を見張り、豪雪地帯のためカツラの好む湿潤な環境が保たれていることが「元気の秘訣」と指摘した。

一方、大きさを計測したところ、幹回りは15・9㍍、樹高は38㍍だった。間明さんは「これまでとの違いは誤差の範囲内だが、今回の数値を白山市などに報告する」と話した。

樹木・植物グループは今後、白峰の「太田の大トチノキ」や吉野の「御仏供杉」などを調べる。小谷二郎グループ長は「巨樹は信仰の対象にもなっている。人々の暮らしの歴史を知る上でも調査は重要だ」と語った。